

長部日出雄(おさべ・ひでお)☆常設展示作家

1、長部日出雄の生涯

＜生涯1 念願の新聞記者へ、そして帰郷＞ 0歳～36歳 1934～1970

小学校に入る前から多くの本を読み、毎日のように映画を観、学校の成績も全教科抜群の＜早熟＞少年であった。新聞記者になるという将来の職業をかなり前から決めていた。小説は中学の時初めて書いた。学校新聞に小説、ルポの類を発表、高校一年で早くも県下学校新聞コンクールで優勝、その才能が高く評価された。

早稲田大学を卒業直前に中退し、読売新聞社へ入社。「週刊読売」の記者としてトップ記事を連発、映画欄も担当していた。

しかし、退社後フリーのルポライターなどマスコミ世界で仕事を続けたが、酒に溺れる日が続いた。自己喪失の危機を打開するため帰郷を決意したのは昭和45年であった。

＜生涯2 自己再生の願いと作家への道＞ 36歳～39歳 1970～1972

当時「小説現代」の編集長だった大学の先輩大村彦次郎から小説を書くことを勧められ、処女作「あゝ断餌鬼」を発表。作家を目指して、また自己再生を願って帰郷、2年4ヵ月滞在した。

津軽の各地を取材し、そこに津軽の精神風土の源流をみる。それは自己の再発見でもあった。津軽は＜未知の国＞であったという。10本の小説を「別冊小説現代」などに発表、そのうち津軽に取材した6本をまとめた第一創作集『津軽世去れ節』を地元の津軽書房から昭和47年上梓、翌48年所収作品「津軽じょんから節」「津軽世去れ節」で第69回直木賞を受賞した。作家への道を歩みだし、47年5月再上京する。

＜生涯3 津軽の風土を追い求めて＞ 40歳～48歳 1973～1982

上京後本格的な作家活動を開始した。49年には津軽の近世を描いた『津軽風雲録』、50年には近年の発掘調査で注目された安東氏の栄枯盛衰を、現代と時

間交錯させた『消えた城塞』、51年には五所川原の豪商佐々木嘉太郎、明治の名工堀江佐吉の生涯と出会いを活写した『風雪平野』を刊行。

さらに、52年からは「週刊文春」に2年間にわたって連載した、超大作『鬼が来た 棟方志功伝』を発表、55年にこの作品で芸術選奨文部大臣賞を受賞した。長部は「この作品で長編作家としての自信を得た」と語っている。津軽の風土を見詰めながら、過去から現在に生きた津軽人の生きざまを見事に表現している。

<生涯4 映画監督と「夢の祭り」> 49歳～55歳 1983～1989

幼少の頃から観続けてきた映画は6000本を超えるという。長部は作家のほかに映画評論家の<看板>も持っている。「週刊読売」の記者のとき、大島渚ら新人監督に「ヌーベルバーグ」と命名したのも長部であった。

「週刊朝日」の映画欄を1年間担当したり、「オール讀物」には56年から休載をはさみながら映画評「紙ヒコーキ通信」を連載した。

63年7月8日、長年の夢であった映画監督として初メガホンをとった。原作・脚本・監督を担当した映画「夢の祭り」である。津軽三味線に男のロマンをかけた物語。カナダのモントリオール国際映画祭「今日と明日の映画」部門でも好評を受けた。

<生涯5 作家活動の充実> 56歳～84歳 1990～2018

57年の『見知らぬ戦場』で第6回新田次郎賞を受賞してその実力が証明され、作家としての地歩を固め、話題作を次々と発表した。平成2年には「まだ見ぬ故郷」を毎日新聞に連載、3年には「海燕」に「風の誕生」を連載した。また、平成14年の『桜桃とキリスト もう一つの太宰治伝』で第29回大佛次郎賞、第15回和辻哲郎文化賞一般部門をダブル受賞した。

ほかにも、映画を題材にした『林檎キッドよ永遠に』や短編小説集『愉快的な撮影隊』エッセイ集『振り子通信』『精神の柔軟体操』などがある。

作家活動以外に、日本ペンクラブ理事や新田次郎賞、柴田錬三郎賞、山本周五郎賞の選考委員、毎日映画コンクール、文芸家協会編纂の中間小説代表作選の選考委員、大学や日本映画学校の講師などの仕事に活躍した。

2018(平成30)年10月18日、虚血性心不全のため自宅にて死去。

2、長部日出雄の代表作

○『津軽世去れ節』

『津軽世去れ節』(昭和47年11月30日 津軽書房刊)は長部が45年1月末に帰郷し、2年4ヵ月滞在したその期間中に発表した10本の短編小説のうち、津軽に取材した6本を所収した第一創作集である。

「死者からのクイズ」(「週刊小説」1972年7月28日号)「津軽じょんから節」(「別冊小説現代」1970年深秋号)「津軽世去れ節」(「別冊小説現代」1971年陽春号)「津軽十三蜆唄」(「別冊小説現代」1971年新春号)「猫と泥鰌」(「別冊小説現代」1971年深秋号)「雪のなかの声」(「別冊文藝春秋」1972年新春号)の6本である。

そのうち「津軽じょんから節」「津軽世去れ節」の2本が48年に第69回直木賞を受賞した。「津軽世去れ節」は戦前の津軽を舞台に活躍した、不世出の天才民謡歌手「嘉瀬の桃」の生涯を太宰治、葛西善蔵とオーバーラップさせながら描出した視点が高く評価された。一連の〈津軽物〉の代表作である。

○『鬼が来た 棟方志功伝』

昭和48年、再上京し作家への道を歩み始めた長部を待っていたのは直木賞であった。力を得た長部は次から次へと作品を発表する。

52年、長部は大作に挑戦する。「週刊文春」に2年間連載した『鬼が来た 棟方志功伝』1800枚である。この時期ほとんどこの作品一本に絞ったという力作である。青森の貧乏鍛冶屋の子が「わだばゴッホになる」と誓い、二度も国際美術展でグランプリを受賞した秘密は何か。膨大な資料と調査を駆使して棟方芸術の核心に迫っていく。

雄大な構想と緻密な構成、輻輳する人物のあざやかな描写、棟方志功の人となり伝える数々のエピソード、志功の内面世界への照射、「一つの〈交響楽〉をねらった小説だ」と長部はいう。棟方芸術の核心に「古代人の魂—文字の原義における鬼」を長部はみた。長部文学のターニングポイントとなった作品である。

○『見知らぬ戦場』

昭和57年7月～翌年1月まで「別冊文藝春秋」に3回にわたって集中連載し、61年に文藝春秋から単行本として刊行された。

昭和 20 年 7 月 26 日、フィリピンのルソン島でマヨヤオにて戦死した長兄茂雄の最期の様子と戦争の悲劇を描いた 400 枚の長編小説である。

終戦を目前にして死んだ長兄は何を考えていたのか、都合 4 回にわたる現地調査と徹底した取材で最期の兄の思いに達する。

しかし、肉親に対する哀悼でこの小説は終わらない。長部の視点は現地住民に移動する。戦争の被害者は戦って死んだ兵士だけではない、容赦なく戦争の災禍に巻き込まれた多くの名もない住民もまた被害者なのだ、という思想に裏打ちされた作品構造になっているゆえに、重層的に戦争の悲劇を伝える。長部は、戦争を知らない若い人にぜひ読んで貰いたいという。

○『紙ヒコーキ通信3 映画は夢の祭り』

幼少の頃から観続けた映画の数は実に 6000 本を超えるという。長部は作家のほかに映画評論家の〈看板〉も持っている。

高校 1 年の時、「若草物語雑感」という映画評を早くも学校新聞に発表。「週刊読売」の記者時代には映画欄も担当していた。また、「週刊朝日」の映画欄も 1 年間担当する。56 年から「オール讀物」に〈紙ヒコーキ通信〉を連載、途中発表形式に変化はあったが現在まで続いている。そのシリーズの単行本の 3 冊目が本書である。

映画をこよなく愛する長部はいう。「ぼくの考えでは、映画は夢の祭りなんです。監督もスタッフも俳優も、それぞれ自分の夢を抱いて、撮影という祭りに集まって来る。そして映画館の暗やみのなかに生まれるのも、観客の夢の祭りで」ある、と。

63 年、念願かなって初メガホンをとる。映画のタイトルは一夢の祭りに。

3、長部日出雄のキーワード

〈キーワード1 津軽三味線〉

昭和 37 年 2 月、心に屈折した思いを持ちながら新聞記者を務めていたからであろうか、「三橋美智也ショー」を観ていた時、木田林松栄の津軽三味線を聞き衝撃

を受けた。なぜか。聴きなれた津軽三味線ではなかったのか。1ヶ月後に読売新聞社を退社。

マスコミ世界に身を投じて、連夜の酒に溺れかかっていた時、恐らく津軽三味線の音色が長部を撃っていたと思う。自己再生を願っての帰郷時、ノイローゼ状態に一時陥った長部を慰めたのは津軽三味線の音色であった。なぜか。津軽一円を取材しながらその問いを自らに課し、その秘密の核心に津軽の精神風土の源流をみた。

津軽三味線ーイタコーお山参詣ー嘉瀬の桃ー太宰治ー葛西善蔵ー棟方志功の制作方法の同一線上には何があるのか。

長部文学の基調をなす、この一本の補助線こそその秘密の鍵であろう。帰郷後の第一作目の「津軽じょんから節」の冒頭にあの衝撃の音色を再現している。

<キーワード2 あすなろ>

「あすなろ、という言葉が好きだった。いうまでもなく、ヒバの別名であって、あすなろ(翌檜)は、『明日はヒノキになろう』の意味だとされている。私はその言葉のなかに、自分の成長にかける少年の夢もしくは後進地帯の夢が秘められているように感じていた」

長部の再上京後のまもなくの発言であるが、その後もその思いはいささかも変わっていないどころか「あすなろ」こそが本県の特長とみている。

確かに本県は<後進>県であるかもしれない。しかしそれは<青春期>にあるからだとし、「青年期の特質に通じる気質を強く持っていたからこそ、佐藤紅緑、太宰治、石坂洋次郎は、日本中の少年少女、若者、若い女性を引きつけて、広く共感を呼ぶ作品を書けたのだとおもう」と、いつている。

あすなろーそれは郷土の精神構造の源流を最も象徴的に語っているかもしれない。

<キーワード3 夢の祭り>

昭和 63 年7月8日、映画「夢の祭り」が岩木山麓で撮影開始された。原作・脚本・監督を担当した長部の初メガホン。「ヨーイ！スタート！」

映画監督になりたいー。この夢を、おそらく少年時代から見続けてきたと思う。

夢の祭りー自分で撮る映画のタイトルはこれ以外にない、なぜなら「個人のものである夢と、集団のものである祝祭。その両者の共通性の上に立つのが映画である」からだと言断する。

主演の柴田恭兵は「役者に注文をつける監督が少なくなっていますが、長部さんはきちんと演技に注文をつけます。ゼツタイ撮りたかったという怨念が感じられます……」と述べている。

カナダのモントリオール国際映画祭の「今日と明日の映画」部門で好評を受ける。長部の人生における夢の祭りでもあった。

4、長部日出雄のゆかりの場所

①帰郷のときの仮寓

向瀬木伏 333 の1 (現弘前市城西1丁目2の8)

昭和 45 年 1 月末帰郷し仮寓したアパート。帰郷当時ノイローゼ状態で家賃を滞納したが、一度も催促されなかった。その恩義は死ぬまで忘れないと長部は語っている。ここを起点に津軽一円の取材に出る。「岩木山が見える2階の窓の下に机を据えて、毎日、小説を書くのだと、僕は殊勝なおもいで胸を踊らせていた。」

②勇気の源泉

岩木山(青森県弘前市)

朝な夕なに岩木山を見て育つ。弘前に帰ったときは、たいてい百沢か嶽に行き、山の景色を見ながら、ビールを飲むという。

「津軽の文化や、津軽人の精神構造の底には、かなり大きな要素として、岩木山信仰がひそんでいるとおもう」とも語る。映画監督で初メガホンをとったのも岩木山麓であった。

③帰郷時の取材地

七里長浜(西津軽郡・北津軽海岸一帯)

昭和 45 年から2年4ヶ月間の帰郷時に津軽一円を取材した。その一つに十三湖がある。後に『消えた城塞』に結実する。そのころの心境を語る。「右を見ても左

を見ても、人っ子ひとりいない津軽半島の日本海に面した七里長浜で、流木に腰を下ろして冷たい握り飯を食べた時の心細さは、いまでも忘れない。」

④戦死した兄の最期の地

マヨヤオ(フィリピン・ルソン島)

終戦直前に戦死した長兄茂雄の最期の様子を知りたい、と思っていた長部は都合4回現地を訪れている。『見知らぬ戦場』『戦場で死んだ兄をたずねて』の2冊の単行本のほか、エッセイ集にもその時の取材状況が報告されている。外国はアジア5ヶ国の他旧ソ連、アメリカ、ドイツ、フランス、カナダなどを訪れている。

5、長部日出雄の関連人物

☆太宰治(だざい・おさむ):文学の師

昭和23年6月、太宰の入水心中事件で長部は初めてその名を知った。当時中学2年で、恩師から「日本で一番えらい作家だ」と聞かされ、読んだ作品が「お伽草紙」であった。その「文章と語り口の面白さに魂を奪われ」てしまった。以来長く太宰を読み続けていたという。

57年に『神話世界の太宰治』(平凡社刊)を上梓し、太宰論を展開したほか、多くの論文を発表している。なぜ太宰なのか。

「かのエディプス王を恐るべき真相に導いたデルポイの碑銘『汝みずからを知れ』にこたえるためであるといってもよい、長いあいだ太宰に惹かれてきた自分の総体(=アイデンティティ)をぼくは知りたいのである。」

☆石坂洋次郎(いしざか・ようじろう):郷土の先人

昭和22年、「青い山脈」が「朝日新聞」に連載されたとき、長部は毎日、新聞を読みながら、「青い山脈」は弘前の町の話だと思ったという。郷土の大先輩で、同窓の先輩でもある石坂洋次郎を強く意識していたことは容易に想像がつく。「青い山脈」の映画の成功はさらにその気持ちを深めた。

石坂文学を戦前から戦後に一貫するリベラリズムの思想に裏打ちされた文学と位置づけて「日本人全体の精神史、思想史の観点に立てば、どんな作家にも引けをとらない影響力を発揮した巨大な存在である」と評価している。

長部が直木賞を受賞したときの選考委員のひとりが石坂洋次郎であった。

☆大村彦次郎(おおむら・ひこじろう):“産みの親”

早稲田大学に在学中、校友会の機関誌「早稲田学報」の編集助手のアルバイトをしていたとき、2人の先輩に出会った。

1人がのちに芥川賞を受賞した高井有一で、長部に「太宰治論」を書くことを勧めた。もう1人が大村彦次郎である。昭和44年、「小説現代」の編集長になった大村彦次郎が「マスコミの底辺で酒に溺れ、溺死しかけていたぼくを見かねたのか、小説を書かないか」と勧め、書き上げた処女作が「あゝ断餌鬼」であった。編集部で原稿を届け、その採用を心配していたとき、「あれ、いけますよ」の大村彦次郎の電話の声を聞いたときの嬉しさはいまでも忘れられないと述べている。

☆高橋彰一(たかはし・しょういち):“育ての親”

昭和45年1月末の長部の帰郷の持つ意義は極めて大きい。46年頃、津軽書房の社主である高橋彰一に出会ったこともそのひとつであろう。2年4ヶ月の帰郷期間中に10本の小説を書き上げ、そのうちの6本をまとめた第一創作集「津軽世去れ節」を津軽書房から上梓、翌48年「津軽じょんから節」「津軽世去れ節」の所収作品で直木賞を受賞したのもその出会いがあったからだ。直木賞の発表当日、高橋は上京しその瞬間に立ち会った。

以後、小説集、エッセイ集、<長部日出雄・津軽の本>全6巻など津軽書房から出版されたが、その緊密な交際について長部は機会をとらえて筆を運ぶ。高橋に贈る言葉のやさしさに胸を打たれる。

6、長部日出雄の資料紹介

○夢の祭り

書画(色紙)

1993(平成5)年

270mm×240mm

「津軽じょんから節」を原作として、長部自身監督をした映画「夢の祭り」と同題の染筆。長部日出雄氏寄贈。

○まだ見ぬ故郷

書画(色紙)

1993(平成5)年

270mm×240mm

キリシタン大名高山右近の活躍を描いた『まだ見ぬ故郷』(平成3年8月)と同題の染筆。長部日出雄氏寄贈。

○「津軽世去れ節」

原稿

257mm×360mm(×2枚)

昭和48年に第69回直木賞を受賞した作品の一編「津軽世去れ節」の冒頭。戦前の津軽を舞台に民謡歌手「嘉瀬の桃」の生涯を描く。長部日出雄氏寄贈。

○「まだ見ぬ故郷」

原稿

1990(平成2)年1月

270mm×190mm(×140枚)

「毎日新聞」に平成2年1月から連載されたものの原稿。平成3年8月、『まだ見ぬ故郷』刊行。主人公はキリシタン大名高山右近。長部日出雄氏寄贈。

7、長部日出雄年譜

1934(昭和9)年…9月3日弘前市土手町133番地に四男三女の末子として生まれる。本名も同じ。

1939(昭和14)年…この頃より店の女給さんに連れられ、毎日のように映画を観

る。

- 1950(昭和 25)年…青森県立弘前高等学校入学。直ちに「弘高新聞」の編集部へ入部。県下学校新聞コンクールに1年生で出場、優勝する。
- 1953(昭和 28)年…早稲田大学第一文学部哲学科社会学専修へ入学。小学校時代から一貫して変わらぬ、新聞記者になるための大学選択であった。校友会機関誌「早稲田学報」のアルバイトで、のちの講談社文芸局長大村彦次郎、芥川賞受賞作家高井有一らと知り合う。
- 1957(昭和 32)年…4月読売新聞社入社。「週刊読売」記者として採用される。スポーツ、映画欄担当。
- 1960(昭和 35)年…60年安保の年。「週刊読売」のトップ記事を書きまくる。当時の全学連委員長、唐牛健太郎を知る。
- 1962(昭和 37)年…秋、フジ・コンサルタント会社(PR会社)に2年間勤務。この頃から、酒に溺れることが多くなる。
- 1965(昭和 40)年…フリーのルポライターとなる。以後TVドキュメンタリー構成、コラム、雑誌のルポルタージュ、映画評論等の仕事に従事。
- 1969(昭和 44)年…この1年間、「週刊朝日」の映画批評欄を担当執筆する。8月1日長編ドキュメンタリー『死刑台への逃走』(立風書房刊)を発行。処女出版である。9月3日処女作「あゝ断餌鬼」を脱稿、「小説現代」11月号に発表。
- 1970(昭和 45)年…1月末、17年ぶりに帰郷、2年4ヵ月滞在。向外瀬木伏 333の1(現弘前市城西1丁目2の8)に仮寓。
- 1971(昭和 46)年…7月23日母みき死亡。享年73歳。この頃津軽書房の高橋彰一と知り合う。
- 1973(昭和 48)年…「津軽じょんから節」「津軽世去れ節」の二作が第69回直木賞受賞。
- 1977(昭和 52)年…「週刊文春」4月7日号より、「鬼が来た 棟方志功伝」を連載開始。同書で昭和54年度芸術選奨文部大臣賞受賞。
- 1981(昭和 56)年…「紙ヒコーキ通信」の連載を「オール読物」1月号より開始する。
- 1982(昭和 57)年…12月戦死した長兄茂雄の最期の様子を確認するためフィリ

ピンのルソン島山中マヨヤオを取材する。

1986(昭和 61)年…10月 17日故石坂洋次郎の葬儀・告別式司会。

1988(昭和 63)年…7月8日映画「夢の祭り」を岩木町で撮影開始。原作・脚本・監督を担当する。夜、法華クラブで激励会。

1989(平成元)年…1月 26日映画「夢の祭り」撮影終了。8月カナダのモントリオール国際映画祭の「今日と明日の映画」部門に参加、好評を受ける。

1990(平成2)年…1月「まだ見ぬ故郷」を毎日新聞に連載開始する。8月『長部日出雄・津軽の本 津軽空想旅行』刊行・全6巻完結。

1991(平成3)年…1月 10日～13日、4度目のフィリピン・マニラ訪問。「海燕」9月号より「風の誕生」連載開始。

1992(平成4)年…1月新聞小説「始発駅」を陸奥新報に連載する(10月まで)。短編集『愉快的な撮影隊』(毎日新聞社)を刊行。

1993(平成5)年…『風の谷』(福武書店)『林檎キッドよ、永遠に』(新潮社)を刊行。

1995(平成7)年…1月「歴史空想紀行」を「新潮 45」に、3月「辻音楽師の唄、もう一つの太宰治伝」を「文學界」に連載する。『二人の始発駅』(新潮社)を刊行。

1996(平成8)年…「歴史空想紀行」を『天皇はどこから来たか』(新潮社)と題して刊行。

1997(平成9)年…2月「反時代的教養主義のすすめ」を「新潮 45」に連載開始。4月『辻音楽師の唄、もう一つの太宰治伝』(文藝春秋)を刊行。10月マックス・ヴェーバー取材のため、ドイツ、フランス訪問。12月NHK 人間大学「太宰治への旅」撮影開始。青森市制百周年記念〈市民野外劇〉「青き都の物語」完成。

1998(平成 10)年…2月「見抜かれた二十世紀 マックス・ヴェーバー物語」を「新潮 45」に連載開始。3月下旬大腸がんで入院、4月6日手術、26日退院。8月青森市合浦公園内市営球場で〈市民野外劇〉「青き都の物語」上演。11月「桜桃とキリスト もう一つの太宰治伝」を「別冊文藝春秋」に連載開始。

1999(平成 11)年…5月『反時代的教養主義のすすめ』(新潮社)を刊行。

2000(平成 12)年…6月『二十世紀を見抜いた男 マックス・ヴェーバー物語』(新

潮社)と改題して刊行。

2001(平成 13)年…7月 27 日から9月9日まで青森県近代文学館で「長部日出雄展」が開催される。

2002(平成 14)年…3月『桜桃とキリスト もう一つの太宰治伝』(文藝春秋)を刊行。この作品で

第 29 回大佛次郎賞

第 15 回和辻哲郎文化賞一般部門

をダブル受賞。

4 月春の褒賞で紫綬褒章を受章。

2003(平成 15)年…第 56 回東奥賞受賞。

2004(平成 16)年…1月「小説新潮」新年号より隔月で「天才監督 木下恵介」連載開始。4月『仏教と資本主義』(新潮新書)、8月『二十世紀を見抜いた男—マックス・ヴェーバー物語—』(新潮文庫)を刊行。

2005(平成 17)年…10 月『天才監督 木下恵介』(新潮社)を刊行。

2006(平成 18)年…1月「小説新潮」に、「邦画の昭和史」を断続的に連載開始。6月 22 日に左足の脱力を感じて、24 日に通院、軽度の脳梗塞との診断を受けて入院。7月 22 日退院。

2007(平成 19)年…1月「小説新潮」の「邦画の昭和史」連載終了。5月『天皇の誕生 映画の「古事記」』(集英社)を刊行。6月文藝春秋の雑誌「諸君！」6月号より「作家が読む『古事記』」を連載。7月『邦画の昭和史 スターで選ぶ DVD100 本』(新潮新書)を刊行。11 月映画評論の活動により、山路ふみ子文化賞を受賞。

2008(平成 20)年…5月『マックス・ヴェーバー物語——二十世紀を見抜いた男』(新潮選書)を復刊。8月前年から「諸君！」に連載した「作家が読む『古事記』」を『「古事記」の真実』(文春新書)として刊行。9月胃がん、大腸がんの手術のため癌研有明病院に入院。11 月旭日小綬章受章。

2009(平成 21)年…5月『富士には月見草 太宰治 100 の名言・名場面』(新潮文庫)、10 月『「君が代」肯定論 世界に誇れる日本美ベストテ

ン』(小学館 101 新書)、12 月『「阿修羅像」の真実』(文春新書)を刊行。

2010(平成 22)年…3月右鎖骨・右足首骨折で至誠会第二病院に入院。4 月昭和 55 年に実業之日本社から刊行された『笑いの狩人 江戸落語家伝』が論創社より復刊。

2011(平成 23)年…12 月「弘前城築城 400 年映画祭実行委員会」によってニュープリント化され、面目を一新した 22 年前の初監督作品「夢の祭り」が、弘前「スペース・アストロ」で上演。

2012(平成 24)年…8月『古事記とは何か 稗田阿礼はかく語りき』(集英社文庫)を刊行。

2013(平成 25)年…5月『新編 天才監督 木下恵介』(論創社)を刊行。

2015(平成 27)年…4月『棟方志功の原風景』(津軽書房)を刊行。5月『神と仏の再発見—カミノミクスが地方を救う』(津軽書房)、『「古事記」の真実』(文春文庫)を刊行。

2016(平成 28)年…2月『日本を支えた 12 人』(集英社文庫)を刊行。

2017(平成 29)年…10 月自宅マンション内で転倒し、右脚大腿骨を骨折。ボルトを入れる手術後、心臓に異変(急性心不全)が生じ、転院して心臓の手術を受ける。

2018(平成 30)年…2月自宅近くのリハビリ専門病院に入院。4 月退院。以後、自宅でリハビリに努める。

10 月 18 日、虚血性心不全のため自宅にて死去。24 日に葬儀・告別式。